（様式１）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成２９年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	高知県	番号	３９

推進地区名	協力校名	児童生徒数
安芸市	安芸第一小学校	２９０

○　実践研究の内容

１．推進地域における取組

（１）学力向上推進計画の施策（参加対象：県内の公立小・中・義務教育学校長及び県立中学校長等）

◆平成２９年度全国学力・学習状況調査結果等説明会

全国学力・学習状況調査の結果から見られる課題や改善方策について共有するとともに，実践発表や講演等を通して，各学校の学校経営計画に基づく組織的・協働的な学力向上の取組を促進させることを目的として開催している。

◆高知県学力定着状況調査の実施

本県の学力課題である小学校中学年の二極化，中１ギャップによる学力の低下に対応するために，小学校第４・５学年及び中学校第１・２学年の児童生徒の学力の定着状況を把握し，学習指導の充実や指導方法の改善に生かすとともに，各学校及び各教育委員会の学力向上検証改善サイクルを確立することを目的として実施している。

小学校第４学年では，国語・算数，小学校第５学年では，国語・算数・理科，中学校第１・２学年では，国語・社会・数学・理科・外国語（英語）の調査を実施し，調査内容は基礎的・基本的な知識・技能及び思考力・判断力・表現力等をみる問題を含むものとしている。

◆「学校経営計画」による組織的な取組の強化

平成２８年３月に策定した「第２期教育振興基本計画」の取組として，チーム学校の構築を位置付け，学校の組織マネジメント力の向上を目指している。具体的には，各校において，教育活動における３年後の目標（目指すべき姿）とこれを達成するための具体的方策等を明確にした「学校経営計画」を策定し，さらなる学校経営力の向上の取組を推進している。

この中期的な目標設定，それに基づく短期的な取組の計画・実践･検証･改善するＰＤＣＡサイクルを充実させることにより，各学校の組織的な取組を一層強化し，学力向上対策をより実効性のあるものにしている。県教育委員会では，退職校長を学校経営アドバイザーとして配置し，各市町村教育委員会と連携しながら，学校とともに本年度の「学校経営計画」の検証を行うとともに，その検証が次年度の計画づくりに生かされ，計画が着実に実施されるよう，年間を通してその進捗状況を確認しながら必要な支援を行っている。

◆学力向上推進対策事業

学力の課題解決に向けて，組織的に取り組む学校を指定し，授業実践力や指導力が高く，且つ，新学習指導要領の趣旨に精通した専門性の高い方を学力向上総括専門官として招聘し，訪問指導等を通して，授業力の向上を図り，県全体の学力向上を目指している。

（２）推進地区及び協力校に対しての指導・助言の状況

◆学力向上推進協議会の設置

推進地区の教育委員会担当者，推進地区の社会教育関係者や保護者等，協力校の学校長及び研究主任等を構成員とし，推進地区の児童生徒の学力を向上させるための取組や方策等について協議を行い，推進地区の学力向上対策の充実を図った。（年間３回実施）

２．推進地区における取組

（１）基礎的・基本的な学力の定着に向けた授業改善

①問題解決学習の質的転換

・根拠を明らかにし筋道立てて説明する力の定着，学力の三つの要素である確かな学力（基礎的・基本的な知識・技能，思考力・判断力 ・表現力，学習意欲）の育成を目指した授業を協力校とともに研究を進めた。

・授業の終末には評価問題を設定し，児童の学習の定着を把握していくとともに，個に応じたきめ細やかな指導をするよう校長会で働きかけた。

・校長会で「高知県授業づくりＢａｓｉｃガイドブック」や「安芸市版授業スタンダード」の授業づくりについて周知し，学校訪問等で取組状況を把握し，指導・助言をした。

②児童生徒が意欲的に取り組む工夫

・児童生徒が「考えたい」と主体的に取り組む姿勢を引き出す課題提示や，学ぶ必然性を持たせるための導入，疑問を生み出す問いを工夫し，学習意欲を高める授業を目指した。

・生徒指導の三機能を意識した授業づくりに取り組み，教科指導と生徒指導による授業改善に取り組むよう助言した。

③学びの定着

・授業で学習した基礎・基本の定着や理解を深めることで，より一層学習を定着させるように授業と家庭学習のサイクル化を図るよう校長会で働きかけた。

・授業で培われた思考力・判断力・表現力等を，総合的な学習の時間や他教科と関連付けることで，学びの定着を図る教育活動を仕組むように助言した。

（２）連携教育による生活・学習習慣づくり

①小小連携及び小中連携を充実

・生活・学習習慣づくりについての取組の円滑な推進を目指し，保幼小中高連携協議会（年３回）を開催し，小小連携及び小中連携の充実を図った。

・「保幼小中高連携だより」を市内の保育所・幼稚園・小・中・高等学校に配付した。

・保幼小中高連携による校種間連携教育研修会（年間３回）を実施し，市内の所属長が一堂に会した研修を設定した。

②家庭学習の定着

・児童生徒の学習意欲の向上や家庭学習の習慣化を図るために「家庭学習の手引き」を配付して，児童生徒や保護者への周知を図った。

・年間２回の家庭学習に関する調査を行い，調査結果を分析し，改善策の確認を行った。

・市広報誌に家庭学習について掲載したり，学校紹介のコーナーを設け，各学校の家庭学習の取組について順次紹介したりするなどの啓発を行った。

（３）教職員の資質・指導力の向上

①外部講師の活用

・指導主事，大学教授，県外講師を招聘した公開授業や研究授業研究会を実施し，指導・助言を受け，指導方法の工夫・改善を図った。

・算数・数学アドバイザーを派遣した授業研究会（年間２回）を開催し，中学校校区で授業改善に向けた研修会を実施した。

②授業実践交流

・協力校の公開校内研修会を複数回開催し，推進地区内の小・中学校への参加を呼びかけた。

・協力校の研究発表会については市内の小学校の悉皆研修として位置付け，取組の普及とともに教職員の指導力の向上の研修会とした。

・教育研究所発行の「研究所だより」を効果的に活用し，協力校の実践や取組，各学校の公開研究授業の様子などを市全体へ普及した。

３．協力校における取組

（１）「主体的な学び」の姿を目指した授業改善の取組

①統一した指導で，児童の「安心感」を生み出す

学習への見通しが立ちにくい児童が，安心して授業に臨めるようにユニバーサルデザインの視点からも，算数の基本的な授業展開の統一化と，板書と児童のノートの一体化を図った。

②問題解決学習の質的転換を図る

授業展開を考える際に，授業のゴールで身に付けさせるべき力を資質・能力ベースで考えていき，そこに向かうべき問題解決の過程を描くようにした。また，指導者の目指す授業の姿が焦点化されるように，学習指導案の様式を工夫・改善した。

（２）連携教育による生活・学習習慣づくり

①中学校との連携を図る

中学校の定期試験期間に合わせて，家庭学習パワーアップ週間を設定した。この期間は，特に自分の学び方を振り返らせたり，教員の評価を充実させたりすることで家庭学習への意識の高まりの促進を図っている。また，全ての授業で生徒指導の３機能を意識した授業を展開し，児童の自尊感情を高めていくようにした。

②地域・保護者と連携教育の充実を図る

安芸市では，家庭学習の意義等を保護者に理解してもらうために，各中学校区で「家庭学習のすすめ」（家庭学習の手引き）を作成し，一層の協力を促すようにしている。また，放課後の補充学習では，地域の民生委員や高校生が協力・支援してくれている。

（３）教職員の資質・指導力の向上を目指した取組

①全校授業研究会を充実させる

教員が指導力を高めるためには，専門性の高い講師等に授業をみてもらうことが有効である。そこで，公開授業や研究授業の際には，必ず指導主事など外部講師を積極的に招聘し，課題の洗い出しと先進的な指導を受けることにした。また，事前研を行う際は，全教員が学習指導要領や教科書を読み込み，自分だったらという具体的な案を持ち寄って参加する。そうすることで，個々の教員の授業分析力を高め，指導力の向上につなげていった。

②授業力を高め合う

全校で統一したことを確かめ合い，高め合うために，算数の授業の板書交流を行っている。１単元１枚のペースで実践後の板書の写真を職員室に掲示し，互いの板書を見合うことを通して授業力を高め合っている。また，若年教員が自主的な研修を行い，ベテラン教員が適宜講師になるなど共に学び合う体制と風土をつくっている。

○　実践研究の成果

１．協力校における取組の成果

（１）基礎的・基本的な内容の習熟が図られ，下位層児童の学力が向上

平成 29 年度全国学力・学習状況調査では，算数の平均正答率が全国比Ａ問題－3.6，Ｂ問題＋2.1 であった。特にＡ問題においては，正答率 50％未満の児童の割合が約 17％であり，大きな課題となっていたが，11 月にＡ問題を再実施した結果，平均正答率は 86.2（＋11.2）となり，正答率 50％未満の児童の割合が約６％にまで減少した。また５年生は，昨年度の高知県学力定着状況調査において，正答率が 25%に届かない児童の割合が約 11％であったが，11 月に実施した昨年度の５年生用調査問題の結果では，約６％にまで減少した。

（２）根拠を明らかにし筋道立てて説明する力の定着

平成 29 年度全国学力・学習状況調査の算数Ｂ問題の記述式問題（全５問）の平均正答率は 35.8％であり，決して力が付いているとは言えない状況であった。しかし，11 月にＢ問題を再実施した結果，順序立てた書き方ができるようになったり，結論から始め，その理由を式や数値の意味を説明しながら記述できるようになったりした。また，不必要な言葉が削減され，より簡潔な表現で記述できるようになるなど，少しずつ記述の内容が改善してきた。

（３）算数好きな児童及び主体的に学ぼうとする児童の増加

算数アンケートの結果から，「算数の授業は好きだ」という児童が増えてきたことが分かる。また，「新しい問題に出会った時，『解いてみよう』と思う」「自分で考えた問題の解き方をノートに書く」「分からない問題が出た時は，前に勉強したことを使って解こうとする」など，主体的な学びの姿につながる項目について伸びが見られた。

（４）連携教育の充実により，家庭学習の促進

昨年度から小中学校で連携し，家庭学習と授業との結び付きを意識してきたり，保護者への協力を促したりしてきたことにより，課題意識を持って家庭学習に取り組む姿勢が育ってきた。

２．実践研究全体の成果

（１）推進地域における高知県学力定着状況調査結果（H30.１月実施　小学校対象児童：第４・５学年）

算数・数学においては計算力の向上が見られ，基礎的・基本的な知識や技能の定着が図られてきている。また，思考力・判断力・表現力を問う記述式の問題においても、無解答率が減少し、書くことに対して意欲的な児童生徒は増えてきている。

しかし，獲得した知識や技能を，日常生活の場面に当てはめて課題の解決方法を考えることや，事実を関連付け統合する力，論理的に説明する力の育成の点については依然として課題が残っている。

（２）安芸市版学力調査結果（H29年４月：第４・５学年，H30年１月：第１・２・３学年及び第６学年に実施）

本年度の第５学年においては，Ｃ層の児童（25.1%→25.0%）Ｄ層の児童（26.7%→26.2%）は若干減少しており，下位層児童の学力が向上してきている。最下位層の児童の底上げにより，全体的に上位層へ移行しているが，Ｄ層の児童の割合は依然として高い状況である。

第６学年においては，　前年度と比較すると，Ａ層の児童が＋1.1（23.5%→24.6%）上昇し，Ｃ層の児童が－4.0（29.4%→25.4%）Ｄ層の児童が－2.9（27.5%→24.6%）減少している。このことからも，学力の上位層が増え，下位層の児童が中間層へ移行したことがわかる。

今後は，組織的に指導力の向上や授業改善に取り組む「チーム学校の構築」，児童生徒一人一人のつまずきに応じた指導が行えるよう，放課後の学習支援の充実を図っていく。

また，学力向上総括専門官による学校訪問などを通して，授業研究をより一層進めるとともに，各学校の取り組みを支援していくなど，授業改善への指導・支援をより強化，加速化させていく。

３．取組の成果の普及

・協力校において公開校内研修会を複数回開催し，県内の小・中学校等への参加を呼びかけた。
・推進地区内の校長会において，各学校の効果的な取組の情報共有を図った。

○　今後の課題

（１）高知県学力定着状況調査の活用

各学校や市町村教育委員会において，本調査結果を分析して，課題の焦点化と課題解決のための対策の具体化を図るなど，本調査を効果的に活用し，子供の学力向上をより確かなものにしていく。

県教育委員会としては，市町村教育委員会との連携を一層強化するとともに，保護者や県民の理解や協力を得ながら，本県の子供たちが将来に夢を抱き，志を育み，社会を生き抜く力を身に付けることができるよう，学力向上の取り組みをさらに充実させていく。

（２）「学校経営計画」による組織的な取組の強化

全教職員が日々の活動の中で目的意識を共有し，組織として一体的な取組を進めていくとともに，中間検証や年度末検証などを通して，各校におけるＰＤＣＡサイクルの機能を充実させていく。

（３）「主体的・対話的で深い学び」のある授業実現を目指す

深い学びを目指す授業改善の視点として、以下のことが考えられる。

＊新学習指導要領の主旨理解
＊問題解決過程の質的見直し
＊知識の質的変革へ向けた指導の充実

これらの視点を基に，子供の真の学びの成果と向き合い，一人一人の子供に確かな学びを保障し，近未来を生きる問題解決者の育成を目指していく。

（様式２）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成２９年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	高知県	番号	３９

推進地区名	安芸市

○　推進地区として実施した取組内容

１. 研究課題

全国学力・学習状況調査等の結果から，本市においては，小学校の算数Ａ・算数Ｂについては全国平均を上回る結果であるが，前年度と比較すると全国平均値との差が減少している。また，算数Ａ・Ｂの正答率の状況を見ると正答率５０％以上の児童数は増加しているが，正答率２５％未満の児童数の伸びは見られず，学力の底上げが十分に図れていないことが分かる。さらに，算数Ｂの正答率７０％以上の児童は約３０％いる一方で，正答率３０％未満の児童も約２０％おり，学力の二極化傾向が見られる。中学校においては，全国平均との差は少しずつ縮まってきているものの全国平均より下回っており，下位層の学力の底上げが十分にできていないことが明らかとなっている。

また，これらの課題解決に向けて，小・中学校ともに組織的な授業改善における教員の指導力の向上が図れていない現状であり，学校差はあるものの組織として取り組むことに弱さがみられる。

２. 研究課題への取組状況

（１）基礎的・基本的な学力の定着に向けた授業改善

①問題解決学習の質的転換

・根拠を明らかにし筋道立てて説明する力の定着，学力の三つの要素である確かな学力（基礎的・基本的な知識・技能，思考力・判断力 ・表現力，学習意欲）の育成を目指した授業を協力校とともに研究を進めた。

・授業の終末には評価問題を設定し，児童の学習の定着を把握していくとともに，個に応じたきめ細やかな指導をするように校長会で働きかけた。

・校長会で「高知県授業づくりＢａｓｉｃガイドブック」や「安芸市版授業スタンダード」の授業づくりについて周知し，学校訪問等で取組状況を把握し指導・助言をした。

②児童生徒が意欲的に取り組む工夫

・児童生徒が「考えたい」と主体的に取り組む姿勢を引き出す課題提示や，学ぶ必然性を持たせるための導入，疑問を生み出す問いを工夫し，学習意欲を高める授業を目指した。

・生徒指導の三機能を意識した授業づくりに取り組み，教科指導と生徒指導による授業改善に取り組むよう助言した。

③学びの定着

・授業で学習した基礎・基本の定着や理解を深めることで，より一層学習を定着させるように授業と家庭学習のサイクル化を図るように校長会で働きかけた。

・授業で培われた思考力・判断力・表現力等を，総合的な学習の時間や他教科と関連付けることで，学びの定着を図る教育活動を仕組むように助言した。

（２）連携教育による生活・学習習慣づくり

①小小連携及び小中連携を充実

・生活・学習習慣づくりについての取組の円滑な推進を目指し，保幼小中高連携協議会（年３回）を開催し，小小連携及び小中連携の充実を図った。

・「保幼小中高連携だより」を市内の保育所・幼稚園・小・中・高等学校に配付した。

・保幼小中高連携による校種間連携教育研修会（年間３回）を実施し，市内の所属長が一堂に会した研修を設定した。

②家庭学習の定着

・児童生徒の学習意欲の向上や家庭学習の習慣化を図るために「家庭学習の手引き」を配付して，児童生徒や保護者への周知を図った。

・年間２回の家庭学習に関する調査を行い，調査結果を分析し，改善策の確認を行った。

・市広報誌に家庭学習について掲載したり，学校紹介のコーナーを設け，各学校の家庭学習の取組について順次紹介したりするなどの啓発を行った。

（３）教職員の資質・指導力の向上

①外部講師の活用

・指導主事，大学教授，県外講師を招聘した公開授業や研究授業研究会を実施し，指導・助言を受け，指導方法の工夫・改善を図った。

・算数・数学アドバイザーを派遣した授業研究会（年間２回）を開催し，中学校校区で授業改善に向けた研修会を実施した。

②授業実践交流

・協力校の公開校内研修会を複数回開催し，推進地区内の小・中学校への参加を呼びかけた。

・協力校の研究発表会については市内の小学校の悉皆研修として位置付け，取組の普及とともに教職員の指導力の向上の研修会とした。

・教育研究所発行の「研究所だより」を効果的に活用し，協力校の実践や取組，各学校の公開研究授業の様子などを市全体へ普及した。

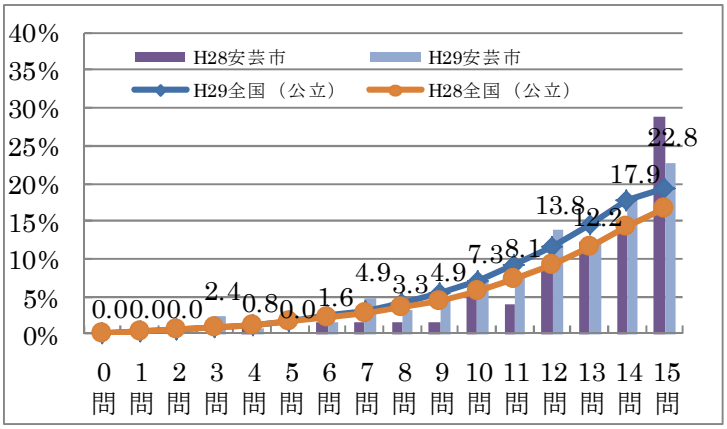
３．実践研究の成果の把握・検証

（１）学力調査の結果から

①基礎的・基本的な学力の定着に向けた授業改善

■平成２９年度全国学力・学習状況調査の結果

４月に実施した全国学力・学習状況調査の結果では，小学校算数では全国平均値がＡ問題については＋1.4，Ｂ問題については＋2.1であり全国平均値より上回っているものの，昨年度と比較すると全国比との差が小さくなっている。特に算数Ａについては，全国平均値との差（＋6.8→＋1.4）が小さくなっており，基礎・基本の定着については改善が図られておらず，課題として捉えることができる。一方中学校においては，数学Ａ問題については全国平均値を上回る結果（－1.9→＋0.4）となり，基礎的・基本的な学力の定着について改善がみられた。だが，Ｂ問題については，昨年度よりも全国平均との差が大きくなり基礎・基本を活用したＢ問題の改善までには至っていない。

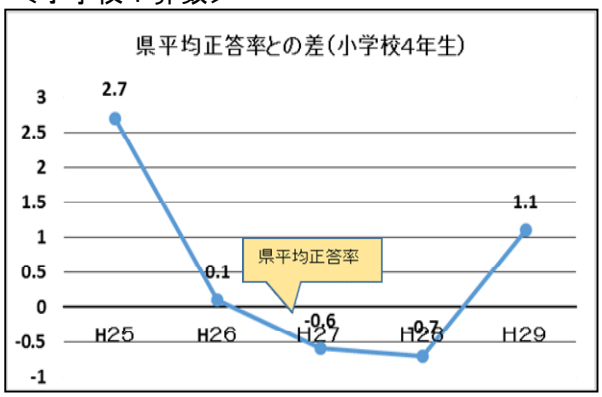


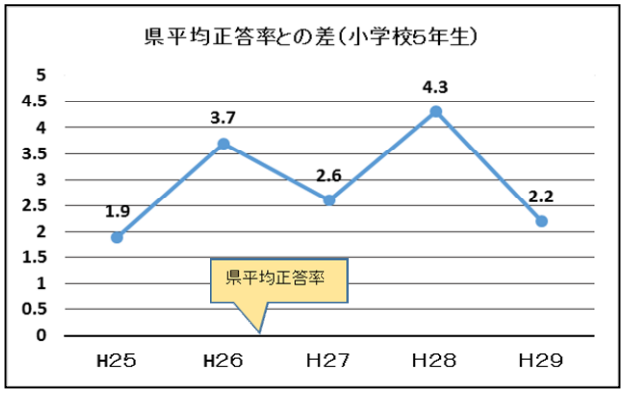
しかし，小学校算数の設問別正答率でみると，算数Ａでは全体に上位層の児童が増えている。正答率が 7 問の児童が少し多いが，平成 29 年度の全国平均値 11 問のところから上位を比べると 12 問，15 問の児童が特出しており，中間層の児童が右寄りとなって基礎的・基本的な学力の上昇がみられる。

■高知県学力定着状況調査の結果

１月に小学校第４・５学年及び中学校第１・２学年を対象に実施した高知県学力定着状況調査の結果は下記のとおりである。

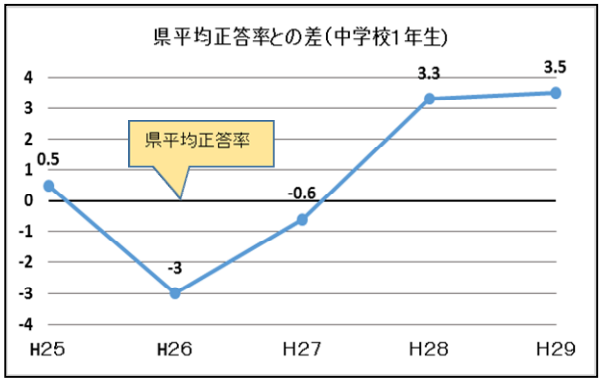
＜小学校：算数＞

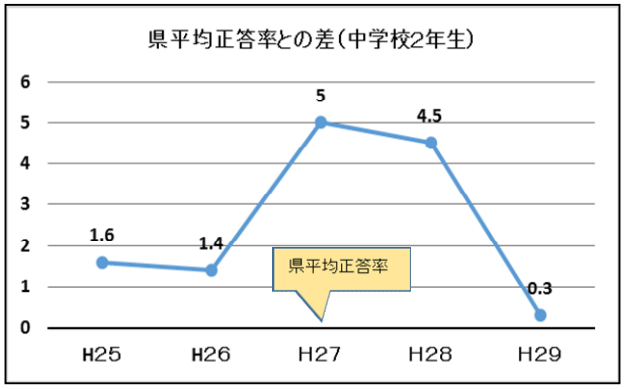




平成 29 年度の本調査では，小学校第４学年と第５学年とも県平均を上回る結果であった。特に第４学年については，平成２７年度から県平均より下回る状況が続いていたが，本年度は＋1.8 上昇しており少しずつ改善が図られている。一方，第５学年については，県平均を上回っているものの前年度より－2.1 下回る結果であった。特に記述式の問題に無回答が多く課題がみられた。

＜中学校：算数＞





中学校第１学年については，平成 26 年度の結果では県平均を－3.0 下回ったが，平成 27 年度から県平均に近づき，平成 28 年度から県平均を上回る状況が続いている。本年度も昨年度よりさらに＋0.2 上昇した。一方，第２学年は，平成 25 年度より継続して県平均を上回る状況であるが，本年度は昨年度より－4.2 下回り，県平均との差が大きく減少した。

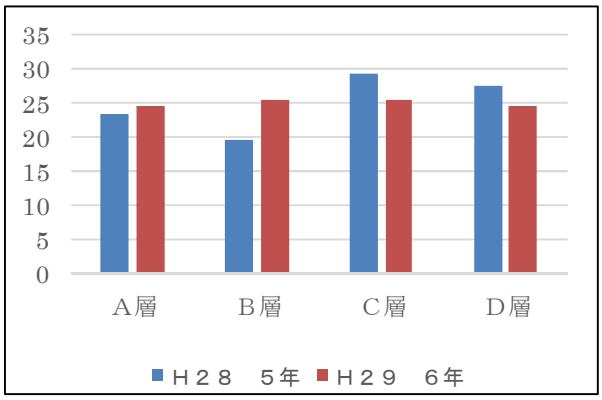
②各学力調査による下位層児童の変容

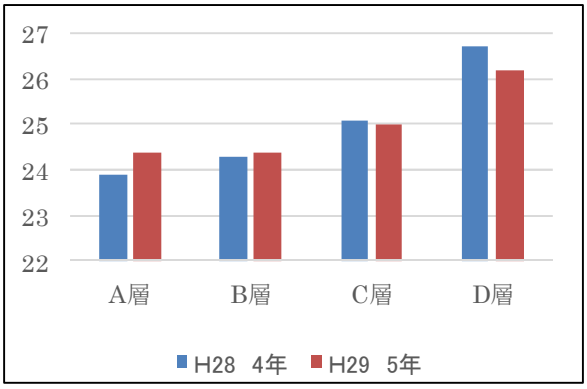
■安芸市版学力調査結果

安芸市版学力調査（市独自で実施）は，４月に第４・５学年，１月に第１・２・３学年及び第６学年に実施している。

次の表は，同一児童（平成 29 年第５学年と第６学年についての検証）における学力層の変容を示している。

【市版学力調査結果　学力層割合（%）】





［学力層割合（%）　Ａ：７５以上，Ｂ：５０以上～７５未満，Ｃ：２５以上～７５未満，Ｄ：０以上～２５未満　］

本年度の第５学年においては，Ｃ層の児童（25.1%→25.0%）Ｄ層の児童（26.7%→26.2%）は若干減少しており，下位層児童の学力が向上してきている。最下位層の児童の底上げにより，全体的に上位層へ移行しているが，Ｄ層の児童の割合は高い状況である。また，第６学年においては，　前年度と比較すると，Ａ層の児童が＋1.1（23.5%→24.6%）上昇し，Ｃ層の児童が－4.0（29.4%→25.4%）Ｄ層の児童が－2.9（27.5%→24.6%）減少している。このことからも，学力の上位層が増え，下位層の児童が中間層へ移行したことがわかる。

（２）家庭学習の習慣の定着

家庭学習調査アンケートは，５月と１２月の２回実施しており，小・中学校肯定的回答を比較してみると，特に予習，復習をする児童生徒が増加していた。

【小・中学校家庭学習アンケート調査（表内数値%）】

家庭学習調査アンケート	肯定的評価	
	H29.5 月	H29.12 月
毎日，宿題はしていますか。	94.5	93.8
宿題以外の勉強（予習）をしていますか。	47.3	52.5
宿題以外の勉強（復習）をしていますか。	56.3	63.6
土曜日や日曜日など学校が休みの日に，勉強をしていますか。	72.5	70.9

家庭学習については 90%以上の児童生徒が毎日学習することができており，家庭学習の習慣化が図られ定着していきているといえる。小学校については，１回目（５月実施）と比較すると，予習（45.1→ 60.5），復習(45.7→ 61.6)の肯定的回答の割合が増加しており，家庭学習への取組は促進している。これは小中連携による家庭学習への取組や児童生徒及び家庭へ「家庭学習のすすめ」を配付し具体的な取組内容を示したこと，さらに広報での啓発により保護者の意識化を図ることで家庭の協力を得ることができたことも向上した要因と思われる。

（３）「勉強がわかる」「勉強が楽しい」の児童生徒が増加

算数・数学アンケートについては年間２回実施（6 月・12 月）し，指導方法の改善に生かしている。結果からみると「勉強がわかる」「勉強が楽しい」の項目については肯定的評価が向上しており改善が見られた。

【算数・数学アンケート調査（表内数値%）】

	肯定的評価（小学校）		肯定的評価（中学校）	
	６月	１２月	６月	１２月
①勉強は役に立つ	98.9	97.0	94.6	87.8
②勉強がわかる	89.1	92.3	76.1	85.1
③勉強が楽しい	34.7	87.4	62.5	65.6

特に「勉強がわかる」については，１回目と比較すると小・中学校とも強い肯定の割合が増加した。要因としては，基礎的・基本的な知識・技能の定着に向けてきめ細やかな指導と授業改善が図られてきたことや，授業の終末で評価問題を位置付け，個々の児童生徒の学習の定着を確認しながらより丁寧な指導をしていることが考えられる。また，学習スタイルを統一したことで学習の見通しを持ち，安心して学習に望むことができたことから，勉強がわかると回答した児童生徒が増加したと思われる。

一方，中学校については，補充指導が強化され，小学校での取組を基に小中連携で取り組んだことで，中学校の授業改善が図られ，肯定的回答が増加したと考えられる。

「勉強は楽しい」については，小学校で肯定的回答の割合が大きく向上した。特に強い肯定の割合が増加していることから，協力校が実践している課題提示の工夫や学習意欲を高める教材の工夫，協働的な学びの授業スタイルを自校の取組に生かしている学校もあり，授業が変わってきたことで「勉強がわかる」や「勉強が楽しい」の肯定的回答が上昇したと思われる。

４．今後の課題

（１）下位層児童生徒の学力の定着

・評価問題を通して学びの定着状況を見取り，授業に生かしていく。
・「安芸市版授業スタンダード」に基づき，学校の実態に応じた授業スタイルを確立・発展させ，児童生徒が安心して学べるように統一性のある授業の構築を図る。
・児童生徒が「考えたい」と主体的に取り組むための課題提示を工夫するとともに，学習意欲を高める授業を工夫するように助言していく。

（２）教員の資質・指導力の向上

・小小連携及び小中連携を強化させ，小中学校間での授業実践交流を図り授業力向上を図る。
・公開授業への参加の働きかけや，市独自の研修会（算数・数学アドバイザー派遣事業）への参加体制を見直すとともに，教員の研修の場を増やす。
・定期的な学校訪問や研究授業等で指導・助言をしていく。

（３）家庭学習の質の向上

・授業と家庭学習をリンクさせ，学習の定着や理解を深めることができるように，家庭学習の内容の見直しを図る。
・児童生徒及び保護者へ，家庭学習についての意識化を図るための啓発を行う。

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成２９年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	高知県	番号	３９

協力校名	高知県安芸市立安芸第一小学校

○　協力校として実施した取組内容

１．当初の課題

◆学力の二極化傾向の改善

平成 28 年度全国学力・学習状況調査結果（算数 AB）を平均正答率で捉えると全国値を上回り改善傾向が見られる。しかし，Ｂ問題では正答率が 25%未満の児童が約 20%存在するなど，平均値は上昇したものの二極化傾向が顕著に見られており，学力下位層児童の学力定着と向上が大きな課題である。

◆根拠を明らかにし筋道立てて説明する力の確実な定着

平成 28 年度高知県学力定着状況調査（４・５年生対象 H29.１月実施）の算数の記述式問題の平均正答率は 24.2%,平均無解答率は 11.7%であり，決して十分な力が育っているとは言えない。また，算数アンケートの結果からも，根拠を明らかにし筋道立てて説明する力の定着が不十分であることがうかがえる。

◆家庭学習の工夫・改善

平成 28 年度全国学力・学習状況調査の児童質問紙結果から，学校の授業時間以外の学習時間が 30 分未満の児童の割合が 12.5%，自分で学習計画を立てて学習に取り組めていない児童が 35.4%と全国値をともに下回っている。児童の学習意欲を喚起するような家庭学習の工夫・改善が必要である。

２．協力校の取組状況

（１）「主体的な学び」の姿を目指した授業改善の取組

①統一した指導で，児童の「安心感」を生み出す

学習への見通しが立ちにくい児童が，安心して授業に臨めるようにユニバーサルデザインの視点からも，算数の基本的な授業展開の統一化と，板書と児童のノートの一体化を図った。

②問題解決学習の質的転換を図る

授業展開を考える際に，授業のゴールで身に付けさせるべき力を資質・能力ベースで考えていき，そこに向かうべき問題解決の過程を描くようにした。また，指導者の目指す授業の姿が焦点化されるように，学習指導案の様式を工夫・改善した。

（２）連携教育による生活・学習習慣づくり

①中学校との連携を図る

中学校の定期試験期間に合わせて，家庭学習パワーアップ週間を設定した。この期間は，特に自分の学び方を振り返らせたり，教員の評価を充実させたりすることで家庭学習への意識の高まりの促進を図った。また，全ての授業で生徒指導の３機能を意識した授業を展開し，児童の自尊感情を高めていくようにした。

②地域・保護者と連携教育の充実を図る

安芸市では，家庭学習の意義等を保護者に理解してもらうために，各中学校区で「家庭学習のすすめ」（家庭学習の手引き）を作成し，一層の協力を促すようにしている。また，放課後の補充学習では，地域の民生委員や高校生が協力・支援してくれている。

（３）教職員の資質・指導力の向上を目指した取組

①全校授業研究会の充実

教員の指導力を高めるためには，専門性の高い講師等に授業をみてもらうことが有効である。そこで，公開授業や研究授業の際には，必ず指導主事など外部講師を積極的に招聘し，課題の洗い出しや先進的な指導を受けることにした。また，事前研を行う際は，全教員が学習指導要領や教科書を読み込み，自分だったらという具体的な案を持ち寄って参加する。そうすることで，個々の教員の授業分析力を高め，指導力の向上につなげていった。

②授業力を高め合う

全校で統一したことを確かめ合い，高め合うために，算数の授業の板書交流を行っている。１単元１枚のペースで実践後の板書の写真を職員室に掲示し，互いの板書を見合うことを通して授業力を高め合っている。また，若年教員が自主的な研修を行い，ベテラン教員が適宜講師になるなど，共に学び合う体制と風土をつくっている。

３．取組の成果の把握・検証

（１）基礎的・基本的な内容の習熟が図られ，下位層児童の学力が向上

平成 29 年度全国学力・学習状況調査では，算数の平均正答率が全国比Ａ問題－3.6，Ｂ問題＋2.1 であった。特にＡ問題においては，正答率 50％未満の児童の割合が約 17％であり，大きな課題となっていたが，11 月にＡ問題を再実施した結果，平均正答率は 86.2（＋11.2）となり，正答率 50％未満の児童の割合が約６％にまで減少した。また５年生は，昨年度の高知県学力定着状況調査において，正答率が 25%に届かない児童の割合が約 11％であったが，11 月に実施した昨年度の５年生用調査問題の結果では，約６％にまで減少した。

（２）根拠を明らかにし筋道立てて説明する力の定着

平成 29 年度全国学力・学習状況調査の算数Ｂ問題の記述式問題（全５問）の平均正答率は 35.8％であり，決して力が付いているとは言えない状況であった。しかし，11 月にＢ問題を再実施した結果，少しずつ記述の内容が改善してきた。以下に示すＡ児は下位層，Ｂ児は中位層，Ｃ児は上位層の児童である。問題の正誤は除き，記述の変容が顕著に見られた児童である。

	４月	１１月
Ａ児 1	かけ算で，１・２・３のカードの差が２けたのひき算の答えが，かけ算ででてくる。	カードの差が１・２・３の場合は，１の差の時は９になって，２，３・・となっていくと，９から２倍，３倍・・となっているので，これが２けたのひき算の答えになる。
Ｂ児 4（1）	５年生でハンカチを持ってこなかった人数。	ハンカチを持ってきて，ティッシュを持ってこなかった人。理由は，５年生は 70 人だから，70－61 をして９になる。両方持ってきてない人が１人だから９－１＝８で，ハンカチを持ってきてティッシュを持ってきてない人になる。
Ｃ児 2（1）	手紙と記念品を小さい封筒に入れると，１通の重さは 27ｇになり，封筒の重さが 50ｇ以内に入るので料金は 92 円になります。これを 20 通送るので，90×20＝1840 小さい封筒に入れて 20 通送るのにかかる料金は 1840 円かかります。手紙と記念品を大きい封筒に入れると封筒の重さが 50ｇ以内に入るので料金は 120 円になります。これを 20 通送るので，120×20＝2400 大きい封筒に入れて 20 通送るのにかかる料金は 2400 円かかります。なので，小さい封筒に入れて送る場合は，大きい封筒に入れて送る場合と比べて，2400－1840＝560　560 円安くなります。	小さい封筒に入れる場合，料金は「50ｇ以内」の 92 円になります。20 通送ろうとすると，92×20＝1840　1840 円かかります。一方，大きい封筒に入れる場合，料金は「50ｇ以内」の 120 円になります。20 通送ろうとすると 120×20＝2400 2400 円かかります。差額は，2400－1840＝560　560 円で大きい封筒に入れて送る場合より小さい封筒に入れて送る場合の方が 560 円安いです。

Ａ児は，４月の記述は説明になり得ていないが，11 月には順序立てた書き方となり意味が分かるようになった。Ｂ児は，４月にはその数が何を表すのかのみを答えているが，11 月には，結論から始め，その理由を，式や数値の意味を説明しながら記述するようになっている。Ｃ児は，丁寧過ぎる説明が課題であったが，不必要な言葉がかなり削減されてきている。この

ことは，昨年度から実施している児童への算数に関する意識調査（算数アンケート）結果の意識の変容からもうかがえる。「算数の授業で問題を解いたとき，『なぜそうなるのかを根拠を示し』分かりやすく説明することができる。」の項目については，68%が肯定的評価をしており，昨年度５月から10Ｐ以上伸びてきた。

（３）算数好きな児童及び主体的に学ぼうとする児童の増加

算数アンケートの結果から，「算数の授業は好きだ」という児童が増えてきたことが分かる。また，「新しい問題に出会った時，『解いてみよう』と思う」「自分で考えた問題の解き方をノートに書く」「分からない問題が出た時は，前に勉強したことを使って解こうとする」など，主体的な学びの姿につながる項目について伸びが見られた。

算数アンケート（肯定的評価：数値は％　3年以上）集計結果

	項　目	H28.5	H29.5	H29.11
1	算数の授業は好きだ。	７３	７２	８５
2	算数の授業の内容は分かる。	８６	８５	９１
3	算数の授業で新しい問題に出合ったとき，「解いてみよう」と思う。	８９	８５	８９
4	算数の授業で自分が考えた問題の解き方などをノートに書くことができる。	７９	８２	８７
5	算数の授業で自分の考えをクラスの人に伝えることができている。	６９	７２	７７
6	算数の授業で問題を解いた時，「なぜそうなるのか」分かりやすく説明することができる。	５７	５７	６８
7	算数の授業で友だちの考えを聞くことは勉強になると思う。	９５	９６	９６
8	算数で分からない問題が出たときは，前に勉強したことを使って解こうとする。	８５	８２	９０
9	算数の授業で学習したことを普段の生活の中で使おうと思う。	８１	８１	８３

（４）連携教育の充実による家庭学習の促進

家庭学習アンケート結果から，課題意識を持って家庭学習に取り組む姿勢が育ってきたことがうかがえる。

家庭学習アンケート（肯定的評価：数値は％　全校）集計結果

	項　目	H28.5	H29.5	H29.11
1	毎日，宿題はしていますか。	９７	９４	９６
2	決まった時間，計画を立てて勉強していますか。	７９	７４	７３
3	宿題以外の勉強（予習）をしていますか。	４２	４６	５３
4	宿題以外の勉強（復習）をしていますか。	３７	３７	４３
5	平日，家庭で１日当たりどれくらいの時間勉強していますか。（１時間以上）	４８	４５	５２
6	土曜日や日曜日など学校が休みの日に，勉強していますか。	４９	４８	５５
7	土曜日や日曜日など学校が休みの日に，１日当たりどれくらいの時間，勉強をしますか。（１時間以上）	２９	２７	３９

特に，昨年度からの取組として小中学校で連携し，家庭学習と授業との結び付きを意識してきたり，保護者への協力を促したりしてきた自主学習の促進が，設問３・４に反映されていると思われる。

４．今後の課題

（１）学力定着の二極化傾向は解消されておらず，課題のある領域や単元を焦点化し，少人数指導など指導方法の工夫改善が必要である。

（２）根拠を明らかにし筋道立てて説明（記述）する力が十分に育っておらず，新学習指導要領の主旨を踏まえた授業づくりを目指した教員の指導力向上が必要である。

（３）授業や家庭学習に対し，主体的な学びの姿勢が十分には育っておらず，児童の学習意欲を喚起する学習課題の工夫や家庭との連携をさらに充実させる必要がある。